

「営農情報メール」配信中!

登録無料!!

作物情報 病害虫対策 青果物概況 イベント案内 など

◆ご登録は、右記のQRコードまたはJA山武郡市のホームページから!
(スマートフォンもしくはパソコンのメールアドレスをご登録ください。)
◎JA山武郡市の組合員なら、どなたでも登録できます!!



農業 テクニカルダイアリー

Agricultural-work technical diary



水稻

営農部営農振興課 営農指導員 小柳 哲義



イチゴ

東金経済センター 営農指導員 瀧沢 悠人

昨年が高温・乾燥傾向で、玄米の一部が白く濁った乳白米(写真③)などが多く発生しました。白未熟粒の発生原因としては、籾数の過剰や、登熟期の高夜温・窒素不足が考えられます。対策として、間断かんがいによる水管理や落水期の延長、葉色の



写真③ 乳白米

白未熟粒(シラタ)対策

登熟期の管理
水稻の収量を構成する要素のうち、登熟歩合と千粒重は登熟期(開花以降)の光合成量が大きく影響しています。そのため、出穂期以降も葉の枯れ上がりを少なくし、株元まで光が届くよう、葉が直立した受光態勢を確保することが重要です。

登熟期の管理

ここ数年は7月以降猛暑日が多く、玄米の外観形質が低下したり、未熟粒が多く網下米が増えたりと、収量・等級に影響を及ぼしています。

斑点米カメムシ対策

カメムシの生態と行動(図①)
基本的な行動パターンは次のとおりです。①水田近くの雑木林や雑草で越冬・産卵・繁殖し、②出穂期の頃から水田内に侵入し、吸汁・産卵・繁殖行動をする、③水田内で孵化した第二世代の幼虫が乳熟期以降の穂を吸汁し、不稔籾や斑点米の被害が拡大する。

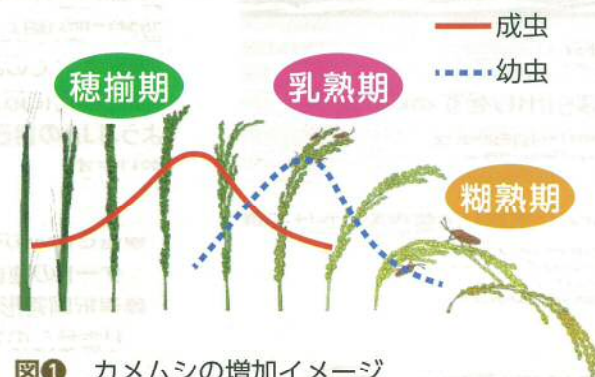


写真④ 斑点米

防除方法
1回目:出穂から穂揃期の粒剤散布。この時期の防除は、水田に侵入してきた成虫が対象です。散布された薬剤成分が植物体内に浸透し、葉や茎を吸汁したカメムシを駆除します。(スタークル粒剤、キップ粒剤など)
2回目:乳熟期の液剤、または粉剤

5月の分析経過について		合計11点
残留農薬分析点数	多成分一斉分析	春ニンジン.....2点
		小玉スイカ.....2点
		タマネギ.....1点
		ソラマメ.....2点
		トウモロコシ.....2点
		夏ネギ.....1点
		春トマト.....1点
土壌診断点数		合計26点

※残留農薬分析において、基準値を上回る成分は検出されませんでした。



図① カメムシの増加イメージ ※イラスト提供: バイエルクロップサイエンス

の散布。1回目の散布から7~10日後を目安に、カメムシに直接かかる液剤や粉剤を選択します。残効は短い反面、直接的な殺虫効果は高く、特に大きい被害を出す幼虫を駆除します。(スタークル液剤10、トレボン粉剤など)

炭そ病(Carbon) 炭そ病(Carbon)

炭そ病には、ランナー、葉柄、たく葉などに発生する局所的な症状と、株が萎凋枯死する全体症状の2種類が存在します。局所型病斑はランナーに最も発生しやすい症状ですが、葉や葉柄にも発生します(写真①、②)。萎凋型は苗や親株に発生し、若い葉が垂れ下がり、やがて枯死します。



写真① ランナーに発生した炭そ病

※写真提供: 山武農業事務所

うどんこ病(Udonko) うどんこ病(Udonko)

初期は葉裏に白色の粉のような病斑が発生しますので、見逃さないように注意してください。病原菌はイチゴの上で潜伏を繰り返す、菌糸または、分生胞子の形で夏や冬を越して感染源になります。ハウスの中でもやがてかかるような湿度の高い環境から、50~60%くらいの乾燥気味の環境でも十分発病します。うどんこ病は、葉以外に花、果実など、さまざまな場所に発生します。発生初期の防除が重要です。



写真② クラウン部に発生した炭そ病(切断面)

※写真提供: 山武農業事務所

表① イチゴの炭そ病に登録のある薬剤

薬剤名	希釈倍率	使用時期	使用回数	作用特性
ベルグートフロアブル	1000倍	育苗期(定植前)	5回以内	予防
キノドーフロアブル	500~800倍	育苗期	3回以内	予防
セイビアー20フロアブル	1000倍	収穫前日まで	3回以内	予防・治療
ファンタジスタ顆粒水和剤	2000倍	収穫前日まで	3回以内	予防・治療

表② イチゴのうどんこ病に登録のある薬剤

薬剤名	希釈倍率	使用時期	使用回数	作用特性
ベルグートフロアブル	1000倍	育苗期(定植前)	5回以内	予防
フルピカフロアブル*	2000~3000倍	収穫前日まで	3回以内	予防
パンチョTF顆粒水和剤	2000倍	収穫前日まで	2回以内	予防・治療
ショウチノスケフロアブル*	2000倍	収穫前日まで	2回以内	予防・治療

※「フルピカフロアブル」と「ショウチノスケフロアブル」は同一成分を含むので、使用回数に注意してください。

で、1週間ごとに薬剤散布に努めてください。同じ薬剤を連続して使用すると効果が低下する可能性があります。ですので、系統の異なる薬剤を散布しましょう(表②)。感染した茎葉は伝染源になるので、焼却するか圃場外で処分してください。